

『自叙伝』への補注(一)

山川菊栄の回想によると、改造社社長山本実彦は、堺利彦、大杉栄、山川均の三人にそれぞれ自伝を書くようにすすめたという『山川均自伝』あとがき。

その当時の『改造』には、片山潜「自伝」(大正十年六月より)、大杉栄「自叙伝」(大正十年十月より)、少しおくれて堺利彦「堺利彦伝」(大正十四年一月より)がそれぞれ七回連載されている。このうち片山の「自伝」は旧稿で、ニューヨークの石垣栄太郎から送られ、『改造』に韓旋したのは室伏高信である。山本がこの三人に自伝を書かす企画を思いついたのは、あるいは片山の「自伝」の話を聞いたからかもしれない。あるいは

ない。まさか死期の近づきを予感して、せつせと書いたわけではあるまい。

ところでこの山本の選に洩れた明治生き残りの社会主義者が二人いる。石川三四郎と荒畑寒村だ。もし山本がこの二人にも頼んだらどうだったろうか。そんな楽しい想像をしてみる。理由はそれぞれ違うだろうが、たぶん二人の自伝を読者は読むことはなかったろう。

荒畑が初めて『寒村自伝』を書いたのはそれからかれこれ二十年余り後の昭和二十二年だが、執筆の動機は大杉に似ている。曰く運動費稼ぎである。敗戦後二度目の国会議員選挙に立候補した際、選挙運動費が必要だったのである。ちなみに、山川が自伝を書きだしたのはそれから三年後の昭和二十五年で、『朝日評論』に連載し、翌年、『ある凡人の記録』と題して刊行されている。『ある凡人の記録』の「まえがき」を信ずるなら、向坂逸郎と『朝日評論』編集部がすっかりお膳立てを備え、書かざるをえない破目に追い込まれたのだそうだ。

石川三四郎が自叙伝に取組んだのは昭和二十三年五

逆に、この企画の方が先で、それを小耳にはさんだ室伏が、片山の話を持ち込んだのかもしれない。

いずれにしても真先に筆をおろしたのが大杉、しばらくしてやおら連載を始めたのが堺、あまり気乗りのないまま、とうとう書かずじまいだったのが山川ということで、それぞれ三人三様の気質を示しており、妙である。山川菊栄は「両氏は早く執筆されたので、はからずも世を早くされたのにまにあつて仕合せでした」と書いているが、これをひっくりかえして考えると、早く書いた順に没している。あまり早く自伝などに筆を染めると早死するぞ、という教訓なのかもしれ

月だから、ちょうど荒畑と山川の間になる。発表されたのは日本アナキスト連盟の機関紙週刊『平民新聞』で、その第七十三号(昭和二十三年五月二十四日)から第百二号(昭和二十三年十二月二十七日)まで、二十五回にわたって連載された。「浪」がタイトルであった。

『平民新聞』はその第四面を文化欄にあて、創刊号以来、連載物を載せる編集をしてきた。最初が石川の「平民社の思ひ出」で、以下、近藤憲二「忘れ得ぬ人」、岩佐作太郎「思い出すまゝ」、山鹿泰治「無政府主義修業」と続いた。いずれもアナキズム運動の長老の回想で、好読物であった。「浪」は山鹿の「無政府主義修業」のあとの企画で、石川永子が『自叙伝』下の「あとがきにかえて」で記しているように、「平民新聞なるが故に拒みきれなく、敢然筆を進め」たのであった。

そのことは唐沢隆三にあてた手紙(昭和二十三年九月五日付)をみても察せられる。「浪」の誤植を指摘してきた唐沢に対する返事で「度々御はがきありがたう。浪(の)誤植注意下され恐縮です。御言葉の通り一行か二行ヌケてゐるのです。コマツタものだが、そのまゝに置いて置きます。いや／＼ながら書き初めたので、足ら

ないところが沢山あります。自分で自分がいやになるが、今少し恥を書いて、止めます」〔本著作集第「七巻所収」〕とある。その頃、『平民新聞』は発行難に陥っており、石川としては運動のために私情を抑えた心情だったとおもわれる。石川は文筆家としてではなく、運動家として、「浪」を書いたのである。

「浪」は少年時代に始まり、ヨーロッパへの亡命で終っているが、なにぶんタブロイド判週刊新聞を舞台にしている仕事であり、さらに充実した自叙伝を、の聲が挙がるのは当然であった。師の心、弟子知らずで、ぼくなども声を挙げた一人である。しかし、石川はその声に耳を傾けず、前へ、前へと進もうとした。『自叙伝』では端折っているので、この時期のことを少し述べておきたい。

昭和二十四年から二十五年にかけて、石川が顧問としてその発展に全力を傾けてきた日本アナキスト連盟では内部抗争が激しくなり、二十五年、分裂した。抗争の原因は、昭和初期に激しく闘われたアナルコ・サンジカリズム派と純正アナキズム派の抗争のほぼ繰返しで、両派の顔触れも大体戦前と同じく、特徴的なこ

とは、いわゆる戦後派連盟員はほとんど前者に属していた。この抗争の渦中で、石川が積極的に両派の調停に動いた気配はない。といって前者の側に立って積極的に活動したわけでもない。

昭和二十六年六月、前者の側に立つ人びとを結集して、アナキスト連盟が結成され、その結成大会は第一日が近藤宅で、第二日は石川宅で開催された。この新しい連盟の推進力は東京では萩原晋太郎、山口健二、関西では向井孝、山口英で、青年の客気に溢れて革新政党張りの綱領、規約を提案した。それに対して石川は、「アナ連もずいぶんデッカクなつたみてえだなあ。こんなものまで作るのかい。メンドウくせえなア」と皮肉ったという。この一言のうちに、石川の態度を窺うことができる。

その頃石川が力こぶを入れていたのは、研究会活動であった。おそらく石川は、再現された醜い内部抗争を目撃して、戦後派の青年たちの教育に希望を託したのであろう。この研究会活動の頂点が『自叙伝』にも触れている近代学校の運動（本巻五七七ページ）で、この運動のために石川は自分の漢籍の一部を整理さえし

た。しかしその夢も会場が確保できぬまま、短命に終わった。池袋の舞台芸術学院へ秋田雨雀を訪ねたのも、会場探しのためであった。

近代学校の失敗後、石川は書齋に籠る。心身ともに疲れ果てたのであろう。しかし恒産のない石川は筆一本で生活費を稼がなくてはならない。おそらく近藤（平凡社の社員であった）の口利きで、石川はかねて懇意の平凡社社長下中弥三郎に会い、ルクリュの『地人論』の完訳を約束した。その折、近藤にあてた石川の手紙は大変朗らかである。

「ルクリュ翻訳の件、まことに有り難う御坐いました。下中社長御気げんうるわしく、これなら大丈夫と存じ、早速仕事に着手しました。何にしても愉快です。大いに馬力をかけます。生存中に全部を完訳したら、どんなに幸福でせう。下中社長にお礼申して下さい。これで長生ができるでせう。」

この上要求がましいこと申しては済みませんが、社長から先きに御申し出でもあつたこと故、お願ひしますが、少しばかりさき借りできるでせうか。雨もりで不愉快極まるところを修繕したいのです。そ

のためこの際五万円ほどほしいのです。貴兄の御見込みで余り失礼でないやうでしたら、御取り次ぎ下さいませんか。これは月々の分とは別にお願ひ申したいのです。何分よろしく御助力賜はり度願上ます。」〔昭和二十七年二月十三日付〕〔本著作集第「七巻所収」〕

石川にとって、エリゼ・ルクリュは、エドワード・カーペンターと並んで彼の精神の大黒柱的存在であり、『地人論』は、マルクス主義者にとつての『資本論』のような位置を占めていた。『地人論』の原書名は *L'Homme et la terre* で、直訳すれば「人と地」あるいは「人間と地球」となる。全六巻から成る大著で、石川は戦前、その第一巻を『地人論』第一巻として公刊している（のち『世界文化地史大系』と改題、再刊された）。石川は、長谷川進、広津信二郎の協力を得て、第二巻の翻訳に没頭した。

だが、このしんどい仕事はすでに疲労していた石川の体を蝕むこととなり、「長生ができる」どころか、翻訳に着手して約半年、脳軟化症に倒れた。「思いがけなく仕事半ばに倒れた父の心中は悲憤やるかたないという有様のようにございました」と、「あとがきにか

えて」で、石川永子を書いてある。もっともこの悲運のおかげで、『自叙伝』は目の目を見ることになったのである。石川にしてみれば、『地人論』の完訳をこそ世に送りたかったであろうが、小康を得たのち、再び翻訳にかかることは健康が許さなかった。川合仁らのすすめもあり、止むを得ず『自叙伝』の口述に取りかかったのは、昭和二十八年三月頃であった。その後の難行苦行については、口述の筆記やまとめにあたった石川永子の記述に詳しい。

「ちょうどこの頃再び知友諸氏から詳細な自伝の執筆を是非にとすすめられたのでございます。しかしペンは持てず、しかも烈しい言語障害のため、仕事など殆んど不可能な状態でしたが、幸い翌春三月頃から病勢稍々好転、この頃から僅かづつ口授の仕事が始められたのでございます。しかし記憶も年代も錯綜し、一々資料を読ませては記憶を系統づけながらの口授で、殊に想を練りながら言語障害のためその発表の困難な焦慮は、傍の目にもつらいものでございました。こうした連続に何度この仕事を打ち切ろうと考えたか分りませんでした。

幸であった。もしもっと早い時期に手がけられたら、『自叙伝』はさらに充実した形をとったに違いない。下巻についてはその思いが特に深い。それは下巻の、敗戦以降の章をはじめ、いささかお手伝いさせていただいた思い出を持つべくにとつて、とりわけ痛切である。

ここで当時石川がいかに「忘れられた思想家」の一人であったかを示す記事を挟んでおきたい。『自叙伝』の執筆が苦渋に満ちていたように、『自叙伝』を出す出版社がしもまた難行をきわめていた。その間の事情について、『アフラシ』というリーフレットの第三十三号（昭和三十一年十二月）にぼくが書いた記事がある。

「ことしの秋は珍らしく読みごたえのある本、出てほしい本が、ぼつぼつ書店に飾られていた。

これは一つにはスターリン批判以来の『雪どけ』が、日本の出版界にもいくぶんえいきょうを与えるようになったからだろう。

たとえば、石川三四郎氏の『自叙伝』が理論社から上下二巻で出版されるというようなことは、日共

上巻は『浪』を基礎資料としましたので文章全体の調子もこれに倣いました。下巻は父の文献を資料とし、これに基いてその記憶感を盛り込んだものでございます。しかし何分にも口述であり、文章そのものの調子が父の文体と若干異なる所も出て、また病床にての事とてまことに不本意な自伝になりました遺憾に存じますが、しかし父の真髄は現わし得ている事と少々自負いたしております。

父は独自の歴史観に基く『古事記神話の新研究』『東洋文化史百講』や『地人論』翻訳の世に問う日の来る事を念願し、これ等原稿を病床においては嘆じております。こうした或日、昔徳富蘆花氏が父の処女出版なる『哲人カアベンター』に寄せて下さいました序文〔本巻所収〕を読み聞かせました処、父は涙を押える事が出来なく、両手で顔をおおって啜り泣いたのでございました。父の生き抜いて参りました八十年の姿をそのまま写し出しているところがあるのではないかと存じ再び巻頭に飾らせて頂きました。」

気の進まぬまま手をつけずにおいたために、不本意な形で『自叙伝』をまとめざるを得なかったのは、不

の出版統制が確立されていた六全協以前には想像もつかないことだ。

石川さんの『自叙伝』にはぼくもいくらかお手伝いしたので、出版までの内情も少しは知っているが、原稿がほぼできてから出版まで、ずいぶん年月がかかっている。

その間、一度はとびついてきたC書房などは、病床にある石川さんにこを足せ、あそこをへらせとずいぶん無理な注文をつけ、とうとう石川さんを怒らせたようなこともあったらしい。

C書房の編集者は、こちらも商売ですから、と涼しい顔をしていたが、編集者が出版は商売でございます、と割切ってしまったら、著者と読者との心のコミュニケーションを本当に可能にするような出版はできなからう。……」

原稿を引き取りに、C書房のO氏を訪れた時の残念さは、いまだにぼくの心のどこに残っている。

このことは、『自叙伝』下の解説で、鶴見俊輔も触れている。鶴見はまず、「石川三四郎氏の自叙伝は、少数者となることを恐れず、仕事そのもののねうちを

信じて生き続けてきた一人の生涯の記録である」と述べ、「石川三四郎氏は、歴史にのこっているその二十代の革命家としての活動によってよりも、その後の五十年の活動によってさらに偉大であった」と正しく評価している。鶴見はまた、「石川三四郎氏は、終始妥協せぬ社会主義者であると同時に、幸福ということを毎日のくらしの中に実現している人である。このことが、私たちにとって石川氏のもつ魅力なのである。この自叙伝の文体を通して、石川氏のきりひらいた幸福の境地にふれることができる」とも書いています。まことに鶴見らしい評言である。そして最後をこう結ぶ。

「石川三四郎氏の著作には、これを助力する貧乏な熱心党ともいふべき集団がつねに存した。古い時代のこととは別として、戦後だけをとってみても、川合仁、大沢正道、唐沢隆三の諸氏が、それぞれ自分の労力と収入の一部をさいて、何度も、刊行への努力をされた。日本の出版界、学界は、いずれも、これらの人々の努力にたいして冷淡であり、むしろ石川氏に資料の出所をもつ多くの第二義的な記録の類、研究論文の類にたいしてより多くの好意をよせて来

た。理論社を通して石川氏の著作が戦後はじめて正常な出版のルートにのったことを、もっとも喜んでゐるのは、これまで目だたぬ仕方である。石川氏の仕事を刊行して来た上記の人々であらう。」

ちなみに、川合は『西洋社会運動史』を、唐沢は『浪』、『わが非戦論史』のちに『石川三四郎書簡集』を、それぞれ自力で刊行している。『浪』は昭和三十一年二月、限定三百部で刊行され、『週刊朝日』書評欄のトップに取上げられた。それをみてある取次が唐沢のソウル社まで注文に来たが、唐沢は品出しを断乎として断ったというエピソードがある。「貧乏な熱心党」の根性話である。それからまもなく家永三郎の斡旋で理論社が『自叙伝』の刊行を引受けることになったが、『柳』の評判も与って力あったように思われる。もっとも、『自叙伝』の反響はやはり淋しかった。

『東京新聞』が「この人この本」欄で、写真とインタビュー記事を組合せて取上げたほかは、一般紙では四十行ほどの『朝日新聞』の紹介と『週刊サンケイ』の書評だけで、その後、『埼玉往来』が「埼玉が生んだ特異の県人」の著書として、『東京新聞』の記事を中心

に紹介したくらいである。昭和三十一年七月十一日に載った『東京新聞』のインタビュ記事は、おそらく公衆の前に現われた石川の最後の姿であった。それには、「もう死んじまって話もできないんだよ。この本は半分死んだときにできたんだけど——娘さんに手をとられて現われた石川翁は、『こんにちわ』とていねいに頭を下げイスに腰を下すところだった。澄んだ声である」と書いてある。

*

「諸賢相変らず御健勝の様子、先づ結構だ。当地【中部フランスのドムムル】に落延びてモウ二ヶ月の余になる。……山川君は大分御奮闘の御様子、早くボンナミを見付けて生活の楽みを味はって貰ひたい。僕の如く淋しく老ひては総てオヂヤンだ。(八月十九日、石川三四郎)」「本著作集第7巻所収」

『新社会』第三巻第三号(大正五年十一月)に載ったフランスからの便りである。この時石川は四十歳であった。石川からの忠告をまつまでもなく、山川はすでに生涯の「ボンナミ」青山菊栄を見つけ、この年の十

一月三日に結婚し、翌年九月に長男振作が生まれてゐる。この知らせを聞いて、石川はひとしお淋しさと老いを感じたのではあるまいか。

幸徳秋水と師岡千代子あるいは菅野スガ、堺利彦と堀美知子あるいは延岡為子、大杉栄と堀保子あるいは伊藤野枝、山川均と大須賀里子あるいは青山菊栄、荒畑寒村と菅野スガあるいは竹内玉、森川初枝、これらの人びとはいずれも、法的な手続きにはかわりなく、夫婦として当時もそして現在も社会的に認知されている。しかし、石川三四郎と福田英子あるいは望月百合子などの場合は、これらの人びととちよつと違う。

荒畑が語ったところでは、堺はよく「石川君はどうもはつきりしない。一緒になっているのならそう言えばよさそうなのだが、そうも言わない、それでいてぼくなんか福田英子と親しくすると焼餅を焼くんだから」とこぼしていたという。真偽のほどは分らない。話が面白くてききすぎているようにも思えるが、奥歯にものがはさまったような思いを周囲の人びとにさせていたことは確かである。田中正造も「この道は別ですから」と言って、石川と福田の間柄を否定はしな

かったそうだ（島田宗三「福田さんと田中翁と私」『福田英子書簡集』所収）。また、石川が亡くなったあとで告別式に代えて開かれた「石川三四郎をしのぶ会」の席上、平民社の面々と交流の深かった小口みち子は、「……その中に石川三四郎さんもおいでになり、とにかく二十七、八ごろでしたしょうか、きれいな青年ボーイだったのです。あとから聞きますと、そのころ福田英子さんがまだ元気で、皆が『ウバざくら』といっているわさしていました。三十九じやもの花じやもの、と言つて一番に昇さんがそういつて（笑聲）居りました。のちに、これはわるいことかも知れませんが、平塚雷鳥さんなどがあり、つばめという言葉が出ましたが、実はつばめなどという事の元祖は石川三四郎さんであることをここに御紹介致しまして失礼いたします」（『石川三四郎をしのぶ』所収）と断言している。なにかいままで言いたくて堪らぬ「秘密」を、やっと公言したという具合であった。もし石川と福田の間柄が公然のものであったら、追悼の集りの席でこんなことは話題にならなかつたらう。

村田静子は『福田英子』（一九五九年）のなかで、石

われる」というのだ。

若き人よ恋は御身等の専有ならじ五十ちの恋の深さを知らずや

現世に老といふことなかりせば吾は語らん五十ちの恋を

結局は肉をさがすと云ふなれ恋は心のとこしゑなれば

君を恋うて睡りもならぬ真夜中にあなたの空にはとときす啼く

こういう恋歌（島田宗三同上回想に所収）を詠んだ福田の恋は片想いだったという村田の解釈はちょっと残忍のようにもおもわれる。しかし、ちょうどおなじ明治四十四、五年頃に石川が詠んだ歌（『本著作集第』には恋歌らしいものは見当たらない。むしろニヒルな心境すら感じられる。

花散りて春逝いて又人老いて酔さめの朝聞くほととぎす

花といふ花は散るなり人といふ人は逝くなり水流ること

流れ来て早や一歳をさすらひぬ芝生の浜に身は餓ゑ

川と福田は「いつのころからか事実上の夫婦関係にまで発展した」と言っている。「一つのこと打ちこむと、ひたむきに情熱をかたむけつくさずにはいられないもちまへの気性から、英子の石川への尊敬と傾倒は、自然、恋愛にまで発展した。そして、自分が子供をかかえた寡婦であることや、十一も年上であることからむ世間の評判など、一切の束縛をふりすて、石川の事実上の妻となることに、それほど大きな抵抗は感じなかったのではあるまいか」として、この二人の関係で積極的のめりこんでいったのは、福田であった、という判断を示している。

それでは石川は福田の激しい愛情をどう受けとめたのだろうか。それについての村田の解釈はクールである。石川が自由恋愛論者であり、当時の結婚制度に批判的であったことはよく知られている通りだが、「この石川にとって、英子はたして恋愛の対象となつたであろうか。彼の感情の機微は、談話や自叙伝によっても十分に知ることはできないが、彼にとって英子は恋人ではなかったのではなからうか。英子との肉体関係は、いわば、自然のなりゆきではなかつたか、と思

もせず

舌に飽きし肉強ひらるる心地する思はぬ人の寄り纏ふ時

潮の干し海の彼方の蟻の如き群に輝やく股白き女

このなかでどうも福田とかかわりがありそうに思われるのは、「舌に飽きし……」の一首ぐらいだが、確証はない。むしろその頃の石川の心境をはっきり示しているのは、帆雨というペンネームで『世界婦人』第三十五、三十六号（明治四十二年四月五日、五月五日）に連載された小説「脱殻」「恋か魔か」（『本著作集第』）である。

この小説は恋人に死なれた男と恋人に裏切られた女との、いずれも青春に傷ついた過去をもちながら、その過去の忘れ難さのゆえに結ばれようとする機微を描いている。それだけ読めば、男女の愛情を描いた写実的な作品だが、石川の『自叙伝』と重ね合わせて読むと、その心情がひしひしと伝わってくる。たとえばこんな会話がある。

「ケレど私、どうしても秋庭（女を裏切つた男の名）の事は忘れられはしませんの、貴方（女）も、亡くなった方を何時ま

でも恋して上て下さいね」

「何故ですか」

「何故って貴方、貴方が、恋の脱殻であればこそ、私の様な大傷を負ふた者も、思ふ存分に打込んで見る気にもなれますわね」

「恋の脱殻」——これが清水澄子（唐沢の考証によれば、本名は清水しげ）との恋を失ったものの、石川の偽わらざる心境だったのではないだろうか。福田英子も望月百合子も、ついに清水澄子が空けていった石川の心の空洞を埋めることはできなかったのではないだろうか。

「恋か魔か」には、男の死んだ恋人の写真の話が出てくる。その写真の裏には、「明治卅五年七月六日、君が学校卒業の当日、嬉しき記念にとて、写し参らす、静江」と書いてあり、その脇に「明治卅九年一月十五日、夜一夜悶へし朝、吾が腕を枕にして安けく眠る清見静江は永へに吾が妻なり、春雄」と添えてある、ということになっている。

石川が東京法学院を卒業したのは明治三十四年七月だが、『自叙伝』ではその時、赤飯と鯛の頭付きで澄

子が祝ってくれた、と記してある。写真については、関東大震災後、澄子の家の焼跡に立ち、「この世の無常を感じざるを得ず」、ヨーロッパ放浪中も肌身離さず持ち歩いた、「かつての日澄子さんに貰った写真と手記」を焼き捨てた、という叙述がある。

「それから大分経ってから私は蘆花公園に徳富蘆花夫人を訪ねた。寒い夜であった。夫人とコタツを囲みながら四方山話につれて、私はこの話を蘆花夫人に物語ると、夫人は別間から母校出身者名簿を取り出してきて、頁をくつてみると何ぞ計らん清水澄子という名前は死亡者の仲間に入っていた。家も灰になり、人も灰になり、すべては無より生じて無に帰ったわけだ。さすがに蘆花夫人も『お可哀想に』という一語を発したのみで沈黙が続いた。」（本巻四二六ページ）

この『自叙伝』の一節は、なかなか深刻である。石川はこの一節を書くことで、長年の精神の重荷を一つおろしたのではないかとおもわれる。ぼくのような俗物にはとうてい計り難いような純な世界に、石川は生きていたのかもしれない。生田春月や秋田雨雀のよう

な純情な魂の持主が石川に魅かれたのも、そのためであらう。石川自身、『自叙伝』で述べているように（本巻九七ページ）、この失恋を契機として、次第に内省的となり、虚無的となり、反政治に傾いていくのである。

石川が亡くなったあと、養女の石川永子が刊行した小冊子がある。それは石川の号をとって『不盡一』と題されているが、寄稿者の大半は女性である。そのいくつかを読んで共通して心に残るのは、石川の「淋しさ」と「優しさ」だ。それを最もはつきり表現しているのは、森熊ふじ子と小沢富士子である。

森熊は昭和四年六月初めから約十九カ月、千歳村の石川宅で生活したことがある。当時石川宅で暮らしていたのは、石川と森熊のほか、望月百合子と奥谷松治、それにテロという物騒な名前をついた雌の赤犬と乳のよくでる山羊一頭であった。森熊は望月のついで甲府から上京したばかりの十七歳の娘で、絵描き志望であった。彼女はあつた時、石川から生涯の一端を語られ、「その時しみじみと先生はお淋しい方だと思」った、と書いている。その時の話がなんであつたか知る由も

ないが、おそらく『自叙伝』で告白したような、蘆花夫人にも打明けたような話であつたらう。石川はよくこの打明け話をしたのかもしれない。

小沢富士子の回想もほぼおなじ頃とおもわれる。小沢は娘の幸子を抱えて女ひとりで暮らしていたが、娘の名前が石川の娘と同名であることなどから、近しくなつたらしい。幸子を連れて一緒に暮さないか、とさそわれたこともあるという。「それよりも当時先生は精神的にも、肉体的にもお疲れになつていて、真からおだやかな憩いの場所としての家庭生活を求めていらしたのではなかつたかと思はれました」と、小沢は三十年前を振り返って書いている。

森熊や小沢たちの文章になんとはなしに影をおとしているのが望月百合子である。望月は率先して断髪に踏切ったモダン・ガールで、『読売新聞』の婦人記者をしていた。石川と親密な関係が続ぶようになったのは、大正十年十一月、石川の二度目の渡仏以後である。その時、望月は石川と同行している。望月は、『デイナミック』の共同編集者であり、一時、同志でもあつたが、一方、石川のことを「パパ、パパ」と呼び、

たとえば石川に髪をとかすのを手伝わせたり、かなり我儘を言ったりしていたらしい。「望月さんが如何に我儘を言われても何時も静かに聞いておやりにな」った、と森熊は述べている。森熊が九カ月で石川の許を去ったのも、小沢が娘を連れて石川のところへ来なかったのも、原因は望月にあったようだ。のちに荒畑夫人となった森川初江が友人の工藤千代らと一緒に石川宅にフランス語を習いに行ったところ、望月が出刃包丁を振りかざして彼女らを追い払った、という話もある。

「恋の脱殻」である石川に愛情を注げば注ぐほど、それは空しさを感じさせる、その苛立ちが望月の独占欲やヒステリーを募らせたのかもしれない。また、石川

の自虐的にもみえる優しさも、そこに根があるようにも思われる。それはいたわりであって、ついに愛ではなかったのだろう。やがて望月は石川の許を去り、古川時雄と結婚する。

なぜ石川は福田英子や望月百合子などと事実上の夫婦生活を営みながら、夫婦として名乗り上げなかったのか、石川はとんだ偽善者ではないか、と世の俗物たちは思うだろう。それがいろいろな憶測を生み、噂となって流れている。しかし、石川にとって、「永へに吾が妻なり」と呼べる女性、いうなれば永遠のベアトリチエは清水澄子ひとりであり、他の女性たちはいたわり合う友人であった、と解することはできないだろうか。

(大沢正道)

石川三四郎著作集第八卷

定価二八〇〇円

昭和五十二年十月五日印刷

昭和五十二年十月十日発行

著者 石川三四郎

発行者 清水康雄

発行所 青土社

東京都千代田区神田神保町一・二九 市瀬ビル

電話〇三(二九)九八三一

振替東京九一・一九二九五五

印刷・三晃印刷 製本・美成社

0330-900201-3978